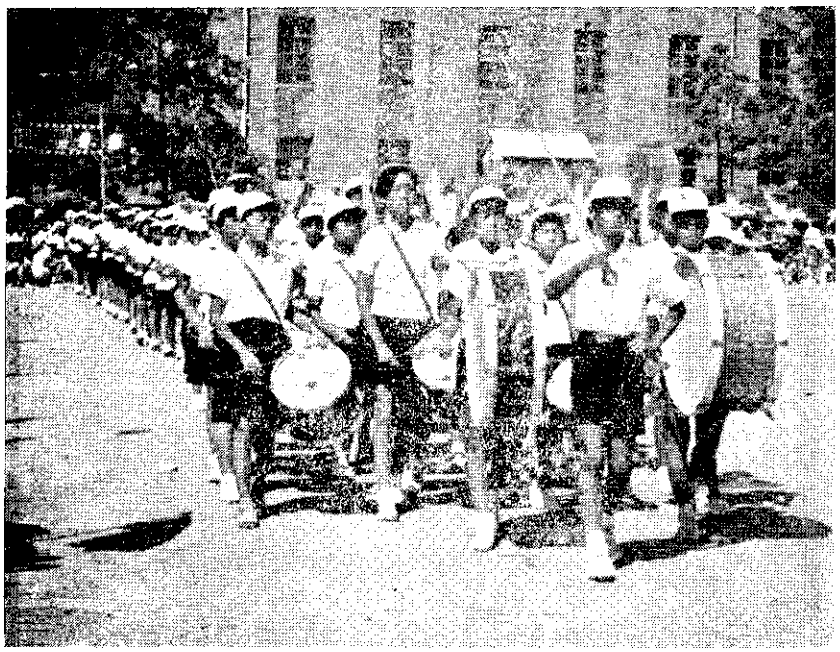


（田口　勝氏　撮影）

『こてきたい』

二年一組　つるさきえりこ

おにいちゃんは　こてきたいに　はいっている。
いつも　いう、
「ひどい先生だ。」
おんがくくらぶのかえりに　こてきたいを見た。
やっぱり　せいき兄ちゃんがいったように、
ひどい先生だ。
ひどくても　四年生から　こてきたいに、
はいりたいとおもっていた。
いまも　はいりたいとおもっている。

小さな小さな物語『上田進先生』

一人息子であった。体は、少さかった。シンがつよく、それでいて表面おとなしい子供であった。

大正15年、三小入学。曲ったことが大きらいで、友達の不正を見ると、もうがまんができなかった。彼からなぐられて泣きだした相手は、きまって兄貴に助けを求めた。友達の兄貴はとんで来て、彼をなぐった。彼は泣いた。痛くて泣いたのではなかった。一人息子の彼は、友達の兄から制裁をうけるのが耐らなく口惜しかったのだ。少年は、青空を仰いで心に誓った。今にみていろ！必ず陸軍大将になって悪者をやっつけてやるぞイ！

少年の名は、上田進。

苦学の日が続いた。少年の成長と共に、日本は戦争に突入した。要塞重砲兵として応召をうけた。台湾から北千島へ！、終戦となって、シベリヤへ抑留された。陸軍大将への彼の夢は、陸軍軍曹で終止符をうった。この頃、彼の頭部に一大異変が起った。烏の濡れ羽色と自慢だった彼の髪がぬけはじめ、やがて哀れにも前頭部が禿げあがってしまったことだ。悲観した彼は、この異変を台湾の酷暑の地から、北千島、シベリヤと厳寒のはてまで引き回されたためだと思った。線路工夫、キコリ、炭鉱夫、製材工、大工、仲仕、道路工夫と、抑留中につとめた職場は数えきれない。

復員した彼は、一人の女性を見た。愛した。決心した。365日に亘る、ひそやかに燃ゆるが如きロマンスのち、二人は結婚した。時に上田進30才、妻キミ子22才。昭和25年三小奉職。低学年担当を経て、37年より特殊学級を受けもった。彼の精進はつづいた。眠らぬ日がつづいた。

『上田学級の子供達が知恵おくれだと考えている人々の差別感をなくしたい。人権、人間としての価値を考えねばならぬ。私は、この子供達が自分の力で一人前にメシがくえるようにしてやりたい。そのために、私のいのちを燃やすのです。』

彼が教育にかける夢は、果てしがない。一男二女の子供は、それぞれに成長した。土曜日の夜、教師としての衣をぬいだ彼は、明日の天気のことを考えて落ち着かない。浜木綿丸と命名した彼のオンボロ釣り船は、日曜の朝、彼を乗せて有明の海にゆれている。釣りの一刻が、人間上田進の一番たのしい時なのだ。日没の海に彼の船はもういない。魚を前に、彼は一合の晩酌を楽しむのだ。翌朝新しい空気を吸って、彼は三小へ自転車のペダルを踏む。上田学級の子供達が待っている教室へ！（山・恍）

各部だより

＊施設部＊

施設部長　谷口房三（桃山）

十五年も前からの宿望であった旗池安全通学道路は、全長約三五〇㍍、昨年十二月末に完成しました。また本年十月十二日に鉄道踏切が出来ましたので、十月十六日に感謝と安全祈願をこめて開通式を挙行しました。

この道路開通により、南部地区児童生徒約三〇〇人は、非常な恩恵をうけることになります。地主さんの土地無償提供、市当局、島鉄、地元選出市議さん、町内会長絡連協議会、南風泊、川尻、下川尻南北町内会、並びに町内育友会、白山婦人会、地元有志の方々からの物心両面からの御支援をうけて出来あがった訳で、感謝にたえません。

＊生活部＊

生活部長　池田真（前山）

生活部では、四月の計画に従って、「少年団のあり方」「夏休みの生活指導」「夏休みの反省」等について話し合い、実践して来ました。

先月は、「家庭教育のあり方」について、次のような内容を検討いたしました。

(1) 家庭学習（宿題も含めて）
(2) 正しいことばづかい、
(3) 読書指導、
(4) 罰のあたえ方、
(5) テレビの見方、

＊教養部＊

教養部長　山本蔦五郎（川尻）

＜総務班＞

去る十月二十三日、県社会教育課長宮田藤臣先生を迎えて、「家庭教育の諸問題」と題する講演会を開き、多数のご出席を得て、大へん有益なお話をお聞きしました。今後は教養部全体の事業として、家庭教育の問題をとり上げていきたいと考えます。

＜学級班＞

町内PTAの集合に、どうしたらもっと多くの人に出席してもらえるか、ということをとりあげて検討し、一応その案を作って町内代議員の方々に実行をお願いしております。今後更にその結果をもとにして、次の案を作り実行をお願いする予定です。

＜文庫班＞

夏休みの巡回文庫が今年は一層好評でしたので、これを更に発展させ、もっと多く利用されるよう努力しています。新しい本も引きつづいて買い入れます。会員皆さんの善意による献本運動もやりたいと思いますので御協力をお願いします。

＜会報班＞

班員皆さんの大へんな努力で、ごらんのような第二匹目の「がんば」をお手もとにさしあげます。味わってください。

チビッコ大将

教頭　村田正二

私は生まれつき小さかった。小学校の一、二年まではべつに気にもかけなかった。三年のとき、大きながき大将とけんかして、むしゃぶりついていったが組み伏せられてしまった。なにくそっと下からかみついたところで、友達が中にはいって引き分けてくれた。それ以来、からだの小さいというハンディキャップに悩むことがしばしばで、どうにかして、大きくなりたいと努力したが、あまり効果はなかった。この前のガンバ第一号で、チビッコ大将という二ックネームをもらって、そのものズバリだと感心したのだが、これが中学時代だったらまたかみついていたかもしれない。

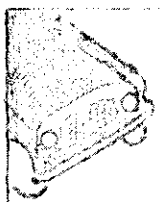
今の子どもにもチビッコはいるけれど、全般的なからだの伸びは実にすばらしい。全国平均で今年の六年生は昨年の六年生より〇・七㌢大きくなっているというから、今後十年もたてば、いまより七㌢くらい大きな六年生ができることになる。いまでも、すくすくとよく伸びた子どもたちを見ると、わがことのようにうれしくなる。

昨年から市内の小体連がはじまっている。小学校の四年生以上が集まっての体育大会である。開会式のとき一小から三会小まで市内六校の選手がずらりと並んだとき、思わずオヤッとびっくりした。大きいだろうと思っていた三小の選手が意外に小さく、一小の選手が目立って大きい。私の子どもの頃は、三小がいちばん大きくて強かった。子ども心に〝三小の子どもが大きいのはきっと魚をたくさんたべるからなんだ〟ときめていたのを思いだしながら競技のはじまるのを待った。結果は、四十五枚の賞状のうち二十四枚を一小がとってしまったので、残りの二十一枚を五つの学校で分けたことになる。小体連は対抗競技ではなくて、個人の記録向上を目標にするのがたてまえだとはいいながら、チビッコの悲哀とまではいかないものの、何か考えさせられるものがあった。ところが学校内でもこれと同じようなことが起こっている。昨年の五年（現在の六年）と現在の五年とくらべると、今年の五年のほうが身長の平均で、一・六㌢大きいし、小体連での成績もなかなかよかった。

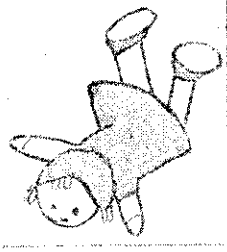
以上二つの例から簡単に結論をだすわけにはいかないが、今の状態では、からだの大きい方が競技にもよい成績をあげると言えそうだ。昨年のオリンピックでも体重制のあるものではよい成績をあげたが、その他の競技では体力不足が強く反省されている。四年後の国体でも、長崎県の体位が全国平均のビリから三・四番という現状では、よい成績をおさめることは困難だろう。勝つためにはよほどの鍛練が必要だということになる。

オリンピック頃から、「なせばなる」というので、鍛練の効果が大きくとりあげられるようになったが、小学生には、無理な鍛練は禁物である。人間のからだは、早く発達するものと遅く発達するものとがあって、筋肉の発達は満十歳でおとなの四十パーセントにしか達しない。一方運動神経による巧緻的な方面では、成人の九十パーセント可能であるので、運動の技術的なものは、ほとんどこの時機に体得してしまう。昔の名人達人とよばれた人々が幼少の頃から修練にはげんだのもこのためであろう。三・四年の頃は、思うぞんぶんとびまわらせてみたいものだ。

人間は何によらず、伸びるときに大いに伸ばしてやらねばならぬ。まだ時機が来ていないのに無理に伸ばそうとしてもいかぬ。チビッコではだめだ。心も、からだもすくすくと伸ばそう。胸を張って人生をおくろう。



こどもを
交通事故から
守りましょう



学校参観について

三小では、毎月15日を学校参観日と定め、父兄の方々の授業参観を広くよびかけてきました。

それでは、学校参観は、どのように行なわれているでしょうか。私達会報班は、学校参観の実態をつかみ、その中から、いくつかの問題を掘り出して、伸びゆく育友会活動の一つの資料としたいために、全員が手分けして足を運び、ここに、ささやかなレポートをまとめあげました。

11月15日の参観日、三小校庭に集まった会報班全員は、話し合いによってきめられた方法で、各学年の教室に出向いて、授業参観に参加された方々からの取材を始めたのです。取材のねらいとする点は、あらまし、次の3点にしぼりました。

(一) 目的
あなたは、学校参観でどのような点を見たいと思いますか。

(二) 感想
あなたは、学校参観をして、どのような感想をおもちですか。

(三) 希望
学校参観をされたあなたは、どのような希望をおもちですか。

その日、私達会報班は、18名の参観者のインタビューを行ないました。そして、その中から、いくつかの問題を掘りだしました。

一番大きな問題は、学校参観者の数が、高学年になるにつれてはなはだしく減少しているということでした。参観される両親の顔ぶれは、いつもきまっていて、大多数の父兄が参観されていない事実を、私達は知りました。

私達は、そこで、学校参観できない理由を調べました。無理を承知の上で、私達は、まだ一度も参観されない方々にお会いして、直接遠慮のない御意見を聞くことにしたのです。次々と回答が寄せられました。これと並行して、学校側のお手数をわずらわした学校参観に関するアンケートも、回答が机の上に山と積まれ、その分析にかかった結果、私達は、次のような理由を拾いあげたのです。

学校参観ができない理由

(イ) 夫婦共かせぎのため学校参観ができない。（この数は、予想以上に多いものでした。）

(ロ) 奥さんが内職のため、学校参観ができない。

(ハ) 主婦にとって、午前中は貴重なまた、多忙な時間である。参観する奥さんにとってみると、服装の問題がまだ残っている。周囲の人がほとんど参観に行かぬので、自分だけ行くのも気がひけて行けない。

(ホ) 姑さんへ気がねがあって、ついおっくうになり、行かない。

(ヘ) 子供の成績がよくないので行きたくない。

(ト) 子供が参観するのをきらうので行かない。

(チ) 別に理由はないが、出かける気がしない。

(リ)

次に私達は、授業参観されている母親のすべてに共通している意見のうち、次のことを特にとりあげることにしました。

それは、日曜日に学校参観日を設けていただいて、その日は、主として父親の授業参観日とするという要望です。PTAの内部のいろいろな動きの中で、『父親不在』が大きくとりあげられている今日、この要望を実現させることは、大きな意義をもつと思うのです。そして、両親が、気楽に学校参観に行けて、大きな成果をあげることができるように、学校側も育友会側も、もっともっと前むきの姿勢で、学校参観の問題を考えなければならないことを、このレポートは、私達に教えてくれたのです。

学校参観をされた両親の感想

―以下は、談話を記事にしたものです。―（敬称略・順不同）

▼一年　黒田カズエ（川尻）

本当をいうと、子供に知られないような場所で見たいと思います。親がいると、子供が何となく落ち着かない気がします。学校でのわが子を見ると、随分成長しているような感じがします。参観父兄の互いの名前がわかるような方法が欲しいと思います。後の方に父兄の名簿をおいて、出席した父兄は、○印をつけるという方法はどんなものでしょうか。

▼一年　阿部恵子（下川尻）

先生も生徒も、父兄の参観を意識しない、普通の状態の授業をみたいと思って来ましたが、このことでは一応満足しています。でも、参観する方々の顔ぶれがいつもきまっているのは考えさせられますね。

▼二年　鶴崎清佳（下川尻）

六年の子の教室をのぞいたら、参観者は私一人でした。熱意不足です。二年の娘は、必ず参観に来てねといいますが、六年の子は恥ずかしいから来るなというのです。これも、高学年の参観父兄が少ないからでしょう。日曜を利用して、父親だけの学校参観を実施していただきたい。

▼二年　日向正路（新山）

学校という集団の中で、わが子が

どのような動きをしているかを見たいと思ったのです。仕事のため、私はこれが始めての参観ですが、許されるならできるだけ時間をさいて、参観したいと思います。教育や、家庭内のしつけについても、女まかせではいけないと思うのです。

▼二年　上田富子（南津町）

先生は、子供達に、どういう点が大切だと教えていらっしゃるのか、それをわが子と共に勉強したいと思って欠かさず来ています。参観の日は、帰宅した子供と話し合いをしていますが、二年の子は参観に来てねとせがむのに、五年の子は、誰も来ないのにおかあさんだけ来たら恥ずかしいから来るなというのです。

▼三年　森川茂寿（下川尻）

始めて参観しましたが、今の子供達は授業中、人と話したり、後を向いたり、席を立ったりで学習態度がよくないですね。自由すぎると思う。先生も、もっときびしさが欲しいです。先生が、生徒一人一人の性格をよくつかんで教育して居られるのは、新しい教育のいい点だと思います。教育ママさんたちは、自分の子の成績本位で教育しているのではないか。親が強制するのではなくて、自分から進んでやるように仕向けることが大切だ。

▼二年　橋村さつえ（白土船津）

戦時中に教育をうけた私達は、今の子供達が学校から持ち帰る問題を、どのように解いたらよいか迷うことがあります。学年だよりにその都度書いては、適切な連絡をうけていますが、より詳しく見聞するために毎月参観に行きます。新教育の下では、私も一年生になったつもりで、子供達と一緒に勉強せねばならないと思うのです。ちょうど国語の時間でしたが、子供達が、あちらからもこちらからも活発に意見を出し合っているのには感心させられました。私達の二年生の時は、とてもできなかったことです。

▼四年　石橋泰子（下川尻）

普通の状態の授業を見たいと思って来ました。学校参観日の連絡を、父兄に必ず手渡すように、父兄の方の印鑑をもらって来なさいとの指示は、始めてのケースでしたが、とてもいいことだと思います。学校参観は、とても有意義で、教えられることばかりです。

▼五年　末松タケノ（八幡町）

数カ月前に長崎から引き越して来たのですが、長崎では高学年でも、少なくとも七・八人の参観者がいます。出席簿がおいてあって、それに○印をつけるのです。このような方法は採用したらいいと思います。高学年になると、参観者が減るのは逆だと思うのです。長崎の小学校と三小をくらべてみると、三小の低学年の生徒はお行儀の悪いのが目立ちます。もっときびしくしつけてもらいたいと思います。先生の教え方は、こまめに分りやすく、親切で感心させられました。

▼五年　梅沢信子（桃山）
　　森川輝子（栄町）
　　喜多久子（栄町）

▼五年

わが子がどの程度ついていっているかを見たいと思って来たのです。家庭ではわかっているわかっているというけれど、果たしてどの程度理解しているのか、親として無関心でいられないからです。子供が三人いると、とても各学級を回れませんので、参観日を分けて下さると助かるのですが……。先日のPTA講演会で、講師の先生が、学校では知識技能を習得させ、しつけは家庭で……という話をされましたが、私は満足できなかった。知識技能と共に、しつけも学校でやって欲しいものです。子供達の行儀作法やしつけを、もう少しきびしくやって欲しいと思います。

▼六年　古川定子（中組）

系統だった教育方法を見、わが子の疑問点を教えてやれるように、自分も学びたいと思います。時間表を調べて出てくるのですが、参観日の午前中は主婦にとって貴重な時間ですから、体操、音楽より算数、理科、国語という五科目を参観できるよう配慮願えないものでしょうか。またお父さん方だけの参観日を、日曜日に設けて欲しいと思います。

▼六年　中島清吾（蛭子鼻）

以前は先生が一番こわかったが、今の子供達は先生を友達のように思っているようですね。もう少し、きびしく教育して欲しいです。

▼四年　松山マス（坂上町）

親が参観することで、子供の学習態度をもりあげ得ると思います。参観する位置ですが、教室の後からよりも、前から見たいと思うのですが……。スパルタ教育とまではいかずとも、もう少しは、きびしくしつけてもらいたいと思います。

▼一年　小見川スヨ（津町）

以前と違って、今は服装のことあまり気にせずに行けるのはうれしいことです。一年と五年と二人の子供がいますが、やはり低学年だけを見学して、高学年には行かぬ場合が多いようです。

▼三年　父（　）

家庭でのわが子は、おしゃべりで、ワンマンだが、教室では、借りてきた猫のように黙っていて、手もあげない。家庭と学校の差について、大いに考えさせられている。内攻性の子供を、どのようにしつけていかれるのか、知っていても手をあげない子供を、もう少し発言できるように教育していただきたい。

両親の意見および学校参観について、先生方の立場からの御意見を伺ってみました

◉両親の立場から一時間きちんと席について姿勢がくずれないような子供であって、そのようなしつけを期待していらっしゃるようですが、一時間中、緊張状態を続けることは苦痛でしかありません。学習時における基本的なしつけの必要性は認めますが、問題は、学級集団の中で子供がいかに学習に参加し、自分なりの考えを深めていっているかということが大切ではないでしょうか。

◉学習の状態を見られる時、自分の子供にだけ親の目が集中していますが、もっと学級全体の子供のようすに目を向けて欲しい。授業中の子供のようすは、熱心に参観されるが、遊び時間において自分の子供が、誰とどんなことをしているかといったことについては、関心がうすいようです。あわせて、給食時間のようすも見られると、子供の偏食の状態等がわかるのではないでしょうか。

◉国語や算数がないと参観にきたかいがないといった考え方を捨てて、どの教科も同じような目で見て欲しいと思います。かたよった見方で教科を云々することは、体育ぎらい、音楽ぎらいといった子供を親がつくるもとになります。

◉共かせぎであっても、どんなに忙しくても、学期に二回は顔を出してほしい。

◉高学年になるにつれて「『うちの子供はどうせできがわるいから。』と」か、『お母さんが来ると恥ずかしいから。』というので参観を敬遠されるようでは、親としての自覚が足りなさすぎると思います。今、自分の子供をどうして伸ばすのが、一番いいかということを、親としても謙虚に反省してほしい。

◉お父さん方を対象とした参観日を設けて欲しいという要望については、今後、年間二・三回は実施できるよう研究したいと思います。

以上で、学習参観に関する小さなレポートを終わります。何でもない対話のようで、こうしてとりあげてみると、私達は一すぎ去った古い時代の教育に郷愁を感じながら昭和四十年の子供達を見ていた自分を発表して、考えさせられます。それがいいとか悪いとかの問題よりも、私達が小学で学んだ時代と今日では、教育も大きな変化（それは偉大な進歩といえるでありましょう。）をみせたという事実を、私達は、今ここで、改めて再認識せねばならないと思うのです。

これからも、いろいろな問題を機会あるたびごとに、一つ一つとりあげていきます。私達と先生方が、胸襟を開き、意見を交換し合って前進するために、会報班は、スペースを大きく提供していきたいと思うのです。先生と父兄が、子供を中心に手をとり合って、共に前進するのです。

九州PTA研究大会参加報告

山本藤五郎（川尻）

去る十一月六・七日の二日間、長崎市において、第十二回九州地区PTA研究大会が開かれ、本校からは江崎副会長、常任委員本多定則氏と私の三人が参加しました。

六日の分科会で私は「成人教育をどう進めるか」というテーマの研究会に参加しましたが、結局、子どもたちの教育をできるだけ誤りのないようにするには、まず親たちが正しい教育のあり方についてもっとよく勉強しなければならない。そしてその仕事を進めるのがPTAによる成人教育の主な役割で、そのためには両親が自覚してもっと多く参加し協力してもらうよう努力しなければならない。ということで、そのための方法について多くの会員の方々から、それぞれの貴重な体験をもとにしたご意見を聞かせていただきました。その具体的な内容については、本校教養部で検討してもらっていますので略します。

七日はまずシンポジウムという形式の討論会で「青少年の健全育成」というテーマで話し合いが行なわれ、

(一) 現在の学校教育が進学第一主義で人間の教育がされていない、といわれるのは社会における学歴偏重や家庭における両親の考え方や希望によるものが大きい。これを是正するにはPTAによる運動や、両親の再教育、反省が必要だ。

(二) マスコミによる悪影響などについては、PTAの運動により悪番組の追放や進んで良い番組を作るように努力すると共に、根本的にマスコミに対して免疫力をつけ、それを批判的に受けとるような健全な批判力を養うよう家庭でしつけるべきである、ということが力説されました。

次いで、広島大学石堂教授による「学校教育の発展とPTAのあり方」という記念講演がありました。

現在の学校教育は、子どもたちの知的面だけでなく情操の面、体育保健の面等から更に社会人として必要な社会生活、家庭生活の基礎までも教えるように発展して来ている。そしてこの社会面、家庭面の教育は家庭での協力がなければ効果をあげることができない。家庭の協力ということは、家庭で勉強を見てやるというようなことでなく、本来家庭でやるべき基本的なしつけをしっかりやってもらうことである。そして、そのためには両親の勉強が必要で、PTAの大きな仕事はその勉強を会員が共同して行なうことにある。この勉強する両親と学校の教師がしっかり手を結んで行くところに新しい教育のあり方とPTAの役割がある。

というようなことで、全体を通して、家庭教育の重要さとそのための親の勉強の必要を痛感しました。

巡回文庫を読んで

読んだ本の感想をまとめてみることも楽しいことです。ほかにもたくさん集まりました

☆ 母と子の文学読本　大沢マサ

『お母さん本の来たけん読んで下さいて渡辺さんのいいなはったよ』外から帰って来た子供に知らされた。下広馬場は十九日～二十四日とのことでお盆過ぎたから少しは時間があるだろうと、たのしみにしていた巡回文庫なのに十九、二十、二十一日とお泊りのお客があり、食事のお世話や市内見物の案内といっこうに時間があかない。『本が来たてよ』二度目の時はさすがに自分でがっかりしてしまった。でもとにかく一冊ぐらいはとさっそく拝見、いろいろと物色する。幅広い本の山、読んでみたい本ばかり、しかし期限は二十四日と迫っている。ずっしりとした文学書等この分だとても駄目だと思いながらやっとこの童話や童謡の短編ものを選んだ。子供の部屋に置いていたら、翌朝『お母さん私はここまで読んだよ』と催促されてしまった。どきりとしながら、お昼過ぎの少しの時間にようやく読むことができた。読んでいると、『ここはこうしてあなるのよ』と横から説明され、また『その次は私が読んで聞かせてやるげ』とその場で朗読がはじまる。一編ごとに有名な評論家の解説があり、読み取り方、良い点、悪い点、更に作者の略歴などがこまかに説明してあった。内容的には子供の知っているものもあり子供自身たのしく気楽に読めたようだった。不断、家事に追われつい文学から遠ざかりがちな私も、こうして親子で読み合いができて、とてもたのしくもっともっと子供にはどんどん良い本を読ませ、また自分も読まなくてはとつくづく感じた。

☆ 母と子の二十分間読書　大場勘四郎

私は兄弟が多かったため、幼児期に母を独占するチャンスがきわめて少なかったようです。すぐ上の兄が小学校に入った頃の一年間はおそらく私の生涯で最も母にせえられた時期であったようです。母に手を引かれて散歩した土手道やグラウンドにキラキラと光っていた草露の輝きをきのうのように記憶しています。

「母と子が毎日二十分も一緒に本を読む運動」私の子供の頃の体験と比べると、夢のようにスバラシイことです。母と子がじかに心をふれ合わせる時間を毎日持ち続けることからどんなに美しい成果が生まれてくることでしょうか。大きな期待を持ってこの本を読み終えました。

☆ テレビッ子　広瀬うき子

たしかに日本は急激にテレビが普及し大衆社会の娯楽として、目をみはるほど発展して来ました。今までの活字文化に代わってテレビによる映像文化は、児童の日常生活に異常なまで奥深く根をおろしてきました。この現状で親として一番心配なのは、(1)テレビに夢中になり勉強がおろそかになるという問題です。私はいつもこの問題で子供と激突したり、いろいろ苦慮したり……それは毎日毎日、同じ動作を繰り返しております。

(2)次に心配されるのは、子供がテレビを見て、大人の世界に徐々に足をふみ入れて行く心配……すなわちお色気番組の愛情シーンや暴力番組の殺人シーンなど……テレビを見て、実際行動に現わさないまでも、悪い考えを身につけ、さらに不良行為をまねはしないかとの私のろうばいです。

けれど、この本を走り読みして、いくらか、杞憂の感がしました。この本の内容を要約しますと、「テレビ番組の選別により子供の規則的なそして計画的な生活を指導するチャンスだ。」と書かれてあります。「家の中での手伝い、遊び、読書、勉強、睡眠などをバランスよく位置づけさせよ。」とあり、そして、それは子供だけではむずかしい!!、親が教師がよく指導し、そのしつけが子供達の生活習慣になるよう指導すべきだ、と結んでありました。読めば　なるほどと思われる点ばかりですが、その実行となると、お互いに難点の続出があるものと思われます。

虫の声

（ある父親）

※学校では、ベルマークを集めて、今度ドッジボールをいただかれた由、結構なことだと思う。学校側と父兄の協力が小さな実を結んで、教育の材料がそろっていくということは、すばらしいことだ。私の子供も、苦労して、やっと200枚ちかく集めた。僕が一番多いだろうといって、元気で登校したのに、帰宅した顔を見ると元気がない。それどころか、不気げんにふくれている。どうしたのだと聞くと、先生は、(その箱に入れときなさい。)と言って、見ても下さらなかったのだそうな。

それからというものは、今後もつづけて集めるように言っても、(もうヨカ！)と言って、見向きもしなくなってしまった。私は、思った。ちょっとした先生のはげましの言葉があったらこの子のはげみになったろうに……と。ほんのちょっとしたできごとのようだが、いろんな問題をもっていると思う。PTAの皆さんも、秋の夜長を細々と鳴く虫の音に、ちょっと耳をかたむけて下さい。

（〇〇〇生）

※学校給食を馳走になったことがある。そして感じたのは、ミルクのまずさだ。子供達に聞いてみても、まずくて飲まぬと言う。においがいやで飲みたくないという子もいた。明日を背負う子供等だ。これでいいのか。

学校だより

▼子ども銀行が地方表彰を受けました。昭和二十六年以降、中央表彰（大蔵大臣、日銀総裁賞）を四回、県表彰を五回受けますが、これも皆さんの御協力のたまものと感謝しています。副賞のドッジボール四個も子どもの体力増強に役立っています。

▼西日本最優秀の読書感想画

五年一組の山崎一朗君が「片耳の大鹿」という物語を読んで描いた感想画がそれです。山崎君、バンザイ！

▼全国児童作品コンクール入賞

県のコンクールで特選に入選した次の三人の図画が、全国でも入賞しました。一年・のりとみたけのり君、五年松田健蔵君、六年・吉田恵美さん。

家庭に話し合いの場を!!

家庭会議をはじめましょう。会議って、どんなことだろう。世の中に本当に心琴にふれるまでゆっくりと話しあいのできる場所が一体どれだけあるでしょうか。やれ面倒くさい、やれ会議の連続だ、民主主義って会議が多い。会議が懐疑になりかねない。こうして民主的であるはずの会議が「ソッポ」をむかれる。「人間って」まことに得手勝手なものである。それには幾多の利害関係や不理解などの要因があることは事実である。この事実を何とか家庭[illegible]

も利害関係の少ない家庭人であってみればうまくいくかもしれない。もちろんお互いの理解の上にたってではあるが？……

しかし考えてみれば家庭にだって人的構成の面から大なり小なり、そうした利害関係がないとは全く断言できない。だがあえてここに家庭会議＝家庭での話しあいを本校育友会として提唱したい。それは、「明るい楽しい家庭づくりから家庭教育推進の具体的実践の場としたい」という大きな期待が寄せられていると確信するからであります。

ややもすれば、子どもが伸びようとする自然の芽ばえを不如意にも大人によってつみとられるケースも多いものです。子どもに教えるばかりでなく、子どもから教えられる一面もあってこそ家庭人として、子どもとともに伸びる、これが本当の人間関係ではないでしょうか。すなおに何の憶面もなくお話しできる家庭、大人も子どもも家庭には秘密がない、これこそ平常における家庭生活のなごやかさからくる明るい楽しい家庭ではないでしょうか。

どうか皆さん方のご家庭でも家庭会議のもつ意義をよくおくみとりいただき、皆さん方の自らの手で「むつましい話しあいの場」が全町内、全家庭のほほえみの中から、うず声高く生まれることを念願するや弱で[illegible]

（小・育友会会長記）

『がんば』の題字について
行司式守伊三郎さんの書

小鉢京さんが橋渡し

『がんば』の題字をごらんになって、その見事な書体に感じ入られた方も多いと思います。

これこそ、正直正路の勘亭流の書体です。東京大相撲の番付表に見られる、あの独特な書体なのです。書いて下さったのは、時津風部屋所属の行司さんで、式守伊三郎さんという人。

田口勝さんが名付親となった『がんば』という会報名については、ひらがなの三字であるため、これを強く印象づけるには、勘亭流の書体以外にないと入探しをしたのですが、独特の書体なので、大相撲関係者以外にはなかなか探せず、弱っていました。ところが、大相撲のことなら俺に任せてくれと名のり出られたのが、同じ会報班で活躍して下さっている小鉢京さんでした。小鉢さんはさっそく、福岡場所中に式守伊三郎さんと会い、題字と色紙を手に帰ってこられました。小鉢さんと式守伊三郎さんの御好意に心から感謝すると共に東京大相撲の関取衆にもおなじみの河豚こと「かんば」のすこやかな成長のために、一層努力したいと思います。皆さんの御協力を、お願い申し上げます。

編集室より

★『がんば』第二号をお届けします。第一号より、少しは成長した姿をお目にかけられるかと思います。これからも、どしどし、御意見をお聞かせください。

★師走です。昭和四十年も、のこりわずかとなりました。

次は三学期、『がんば』第三号でまたお目にかかります。

では、どうぞ、いいお年をお迎えください。

（会報班一同）

加藤勝彦
谷口三矢
草野洋子
山本悌一郎
田中十郎
小鉢京
本田幸男
田口勝
坪田勘次郎
加藤一美
遠武照子
緒方喜十

『がんば』第三号
島三小育友会教養部会報班
昭和四十年十二月五日　発行